H-5

古代日本語における無生物主語の受身文について

林下淳一 (University of Otago)　後藤睦 (大阪大学／日本学術振興会)　金水敏 (大阪大学)

1. はじめに

背景

- 古代日本語の受身文は、文が表すイベントによって、有生物が何らかの心理的影響をうけている状況を表現する構文であると考えられている。実際に受身文の多くは(1)のように心理的受影者になりうる有生物を主語とする。

(1)　思ふ人の、人にほめらるるは、いみじううれしき.（枕草子・130）

- 一方、心理的受影者になりえない無生物を主語とする受身文の存在も報告されている。そして、これらの無生物主語の受身文を有生物主語の受身文と同様に扱うすべを様々な研究者が議論してきた (山田 1908, 原田 1974, 小杉 1979, Kuroda 1979, 金水 1993)。

問題提起

- この議論の背景には、明示的には述べられていないものの、以下の問題提起が考えられる。日本語受身文が、一般的に心理的受影者の存在を要し、受身主語が基になる動詞の項でない間接受身になりうることから、日本語には動詞と組み合わされることによりその動詞に新たな項を加える受身接辞「加項ラレ」があり、その「加項ラレ」が心理的受影者の存在に関与していると仮定するのが妥当であろう。一方、英語タイプの言語における受身文は、常に直接受身であり、動詞と組み合わされることによりその動詞の外項を取り除く「除項接辞」が関与すると仮定されている。「除項接辞」が関与する受身文では、無生物が主語となるのは通常であるので、古代日本語における無生物主語の受身文の存在は、日本語に昔から、「加項ラレ」の他に「除項ラレ」が存在していた可能性を示唆する。

本発表の目的

- Hayashishita & Takai (2017)の現代日本語の受身文の分析を基に、古代日本語における無生物主語の受身文を調査し、その中には「除項ラレ」が関与していると考えるのが妥当である例が存在すると論ずる。つまり、日本語に昔から、「加項ラレ」の他に「除項ラレ」が存在していたという説を提案する。

2. 現代語における受身文

- 現代日本語においての直接受身文の中には、動作主句が「ニ」を伴うもの (以下、ニ受身文) と「ニヨッテ」を伴うもの (以下、ニヨッテ受身文) が存在する。ニ受身文は (直接受身、間接受身共に) 古代日本語の中にも見られる一方、ニヨッテ受身文は 19 世紀後半オランダ語の受身文を翻訳するために使用されたのが最初であるとされる (金水 1991)。

- Kuroda (1979)、金水 (1993)は、ニヨッテ受身文は「除項ラレ」が関与する一方、ニ受身文は、直接受身か間接受身かにかかわらず、常に「加項ラレ」が関与していると論じている。この仮定をとれば、オランダ語

の受身文は「除項接辞」が関与するものであるので、ニヨッテ受身の導入を日本語への「除項ラレ」の導入と捉えられる。

- しかし、Hayashishita&Takai (2017)は、直接ニ受身文には「除項ラレ」が関与しているもの、そして「加項ラレ」が関与しているものがあると論じている。ニヨッテ受身文に関しては Kuroda (1979)、金水 (1993)と同様の立場を取るので、Hayashishita & Takai の主張は以下のようにまとめられる。

	ニ受身文			ニヨッテ受身文
	間接受身	直接受身		直接受身
「加項ラレ」が関与している？	Yes	Yes	No	No
「除項ラレ」が関与している？	No	No	Yes	Yes

2.1. 「除項ラレ」が関与する直接ニ受身文

Hayashishita&Takai (2017)の「除項ラレ」が関与する直接ニ受身文が存在するという根拠を二つ紹介する。

証拠１

- まず、間接受身文 (つまり、「加項ラレ」が関与する受身文) でも主語が無生物の場合がある。

(2) a. エジプトの国立博物館が盗賊に貴重な遺跡を盗まれたんだって.
b. サン・サーンスのピアノ協奏曲が嫌がらせのためにしばしば下手なピアニストにその第 3 楽章を演奏された.

- しかし、主語が無生物の場合、心理的受影者が他に存在し、その受影者がその主語から推測できなければならないと論じている。つまり、主語が心理的受影者のシンボルとなっているのである (Cf. 益岡 1991)。(2)と(3)の間に容認性の違いがあるのはこのためである。

(3) a. ?*クフ王の時代が盗賊に貴重な遺跡を盗まれたんだって. (Cf. (2a).)
b. ?*サン・サーンスのピアノ協奏曲がその超絶技巧故にしばしば 10 代のピアニストにその第 3 楽章を演奏された. (Cf. (2b).)

- それに対し、直接受身文では、このような主語にかかる制約はない ((4b)、(5b)参照)。

(4) a. ?*クフ王の時代が盗賊に遺跡を盗まれることがよくあるそうだ. (Cf. (3a).)
b. クフ王の時代の遺跡が盗賊に盗まれることがよくあるそうだ.

(5) a. ?*サン・サーンスのピアノ協奏曲がその超絶技巧故にしばしば 10 代のピアニストにその第 3 楽章を演奏された. (= (3b))
b. サン・サーンスのピアノ協奏曲第 3 楽章がその超絶技巧故にしばしば 10 代のピアニストに演奏された.

- ニヨッテ受身文に関しても、間接受身文で観察されるような主語にかかる制約はない ((6b)、(7b)参照)。

(6) a. ?*部屋の家具が住居人に配置を変えられた.
b. 部屋の家具の配置が住居人によって変えられた.

(7) a. ?*元旦が若者達に静寂な空気を破られた.
b. 元旦の静寂な空気が若者達によって破られた.

- よって、直接ニ受身文の中には、間接受身文と同様に扱うのではなく、ニヨッテ受身文と同様に扱うべきものが存在する。

証拠２

- 主語が心理的受影者のシンボルとなっていない(つまり間接受身文と同様に扱えない)直接ニ受身文は、アスペクトの制限を受ける。ニヨッテ受身文も、受ける制限そのものは異なるがアスペクトの制限を受ける。

  動詞を含む文は、状態性かイベントプロセスのどちらかを表現する。当該の直接ニ受身文は状態性を表現できるが、イベントプロセスは表現できない。一方、ニヨッテ受身文はその反対である。

  (8)、(9)の文は状態性を表現しており、間接受身文と同様に扱えない直接ニ受身文は容認可能であるが、ニヨッテ受身文は容認性が低い。

(8) a. 喜びの涙が人々に好まれるのは当然だ.
(Cf. *喜びが人々に涙を好まれるのは当然だ.)
b. *喜びの涙が人々によって好まれるのは当然だ.

(9) a. 理想的な飲食店というのは, 名物料理の味がそれを作っている店主に自慢されるようなところだ.
(Cf. ?*理想的な飲食店というのは, 名物料理がそれを作っている店主に味を自慢されるようなところだ.)
b. ?*理想的な飲食店というのは, 名物料理の味がそれを作っている店主によって自慢されるようなところだ.

  一方、(10)の文はイベントプロセスを表現しており、ニヨッテ受身文は容認可能であるが、間接受身文と同様に扱えない直接ニ受身文は容認性が低い。

(10) a. 私は確かにこの耳でボールが太郎によって打たれる音を聞いた.
b. *私は確かにこの耳でボールが太郎に打たれる音を聞いた.

- 動作主句を取り除くと上でみた容認性が低い文の容認性が上がる ((11)参照)。つまり、アスペクトの制限は動作主句に起因されるのである。

(11) a. 喜びの涙が好まれるのは当然だ. (Cf. (8b).)
b. 理想的な飲食店というのは, 名物料理の味が自慢されるようなところだ. (Cf. (9b).)
c. 私は確かにこの耳でボールが打たれる音を聞いた. (Cf. (10b).)

- もし動作主句が動詞の項であるのならば、このようなアスペクトの制限を与えることはない。よって、ニヨッテ受身文のニヨッテ動作主句だけでなく、当該の直接ニ受身文のニ格動作主句も付加詞と考えられる。ひいては、ニヨッテ受身文だけでなく、当該の直接ニ受身文も「除項ラレ」が関与しているということになる。

2.2. 「加項ラレ」が関与する直接ニ受身文

Hayashishita&Takai (2017)の「加項ラレ」が関与する直接ニ受身文が存在するという根拠を一つ紹介する。

- 主語が心理的受影者のシンボルとなりえない場合の直接ニ受身文は、ニヨッテ受身文と同様、アスペクトの制限があることを上で確認した。ところが、主語が心理的受影者のシンボルとなりえる場合の直接ニ受身文は、間接受身文と同様、アスペクトの制限を受けない。

(12) a. あの凶悪犯の笑顔が人々に好まれるというのは皮肉な話だ.
b. 私はこの耳で次郎の体が太郎に棒で打たれる音を聞いてしまった.

(13) a. あの凶悪犯が人々に笑顔を好まれるというのは皮肉な話だ.
b. 私はこの耳で次郎が太郎に棒で体を打たれる音を聞いてしまった.

- つまり、この場合の直接ニ受身文のニ格動作主句は、間接受身文の場合と同じく、動詞の項であると考えられるので、「加項ラレ」が関与していることになる。

2.3. 辞書の中に登録済みの「受身動詞」を含む文

- Hayashishita&Takai (2017)は、(14)のように対応する能動文が存在しない例があることを指摘し、これらは「ラレ」を含む動詞が既に話者の辞書の中に登録されていると考えるべきであるとしている。

(14) a. 沢山の荷物が電車に揺られている. (Cf. *電車が沢山の荷物を揺っている.)
b. この大火事で多くの人が焼け出された. (Cf. *この大火事が多くの人を焼け出した.)

- つまり、一見受身文に見えるものの中に、「除項ラレ」、「加項ラレ」のどちらも関与していないものが存在するということである。

3. 古代日本語における無生物主語の受身文

ニヨッテ受身文は 19 世紀後半まで確認されていないが、ニ受身文は昔から存在する。Hayashishita&Takai (2017)のニ受身文の中に「除項ラレ」が関与しているものが存在するという説を受け、古代日本語の無生物主語の受身文を調査した。調査にあたっては、上代語から中世語を中心として文献を選定した。調査資料は稿末に示している。

- 無生物を主語とする受身文の確例は四種類に分類できる。

<u>タイプ 1</u>

- 一つ目は、受身主語と動作主句の両方が無生物である例である。

(15) a. 浮き海松の浪に<u>寄せられたる</u>ひろひて、家の内にもて来ぬ。（伊勢物語・87）
(Cf. 浪が浮き海松を寄す)
b. 夕暮, 暁にかは竹の風に<u>吹かれたる</u>、目さまして聞きたる。（枕草子・115）
(Cf. 風がかは竹を吹く)

- これらに関しては、2.3 で述べたように対応する能動文が存在しないので、「ラレ」を含む動詞が既に話者の辞書の中に登録されていると考えられる。つまり、「除項ラレ」が関与していると考える必要がない。

タイプ 2

- 二つ目は、受身主語が無生物ではあるものの擬人化されていると考えられる例である。

  下記の(16a)は受身の主語と考えられるのは「花」であるが、これは純粋な無生物主語の受身とはいえず、なんらかのメタファーである可能性も排除できない。(16b)も同様である。

(16) a. 雪降れば冬こもりせる草も木も春に知られぬ花ぞ咲きける（古今和歌集・6・323）
b. とどめあへずむべもとしとは言はれけりしかもつれなく過ぐる齢か（古今和歌集・17・898）

- これらは受身主語が心理的受影者と考えられるので「加項ラレ」が関与していると考えうる。

タイプ 3

- 三つ目は、受身主語が無生物で擬人化もされていないが、文脈から心理的受影者の確認ができる場合である。

  下記の(17a)の例であれば、「車」が受身の主語になっている。この場合、「車」には乗る人間がいるため、心理的受影者であるといえる。(17b)も同様に、「襪」が受身の主語になっているが、「襪」は履物であり、それを履いている人間（心理的受影者）がいるといえる。

(17) a. さきなる車は、後ばやに越されて、人々わびにたり。（落窪物語・2）
b. 灯台の打敷を踏みて立てるに、あたらしき油単に、襪はいとよくとらへられにけり。（枕草子・104）

- これらの場合、受身主語が心理的受影者のシンボルでないと言い切れないため、「加項ラレ」が関与している可能性も排除できない。

タイプ 4

- 最後は、受身主語が無生物で擬人化もしていない、そして文脈から心理的受影者を確認できない場合である。

  (18a)の例は「格子」が受身の主語であると考えられる。この場合、擬人化されている例とも見なしがたく、また心理的受影者もないといえる。(18b)および(18c)も同様に、受身の主語「御装束の下襲」「蓬」は擬人化されている例でも、心理的受影者の例とも言えない。

(18) a. 「なぞ、かう暑きにこの格子は下ろされたる」と問へば、（.....）（源氏物語・空蝉）
b. せばき縁に所せき御装束の下襲引き散らされたり。（枕草子・100）
c. 蓬の、車に押しひしがれたりけるが、輪の廻りたるに、近ううちかかりたるもをかし。（枕草子・207）

- これらは、「加項ラレ」が関与していると考える根拠がないため、「除項ラレ」が関与していると考えるのが妥当であろう。

「除項ラレ」とニヨッテ受身文導入説

- (18)に挙げた無生物主語の受身文は、すべて状態性を表現している。このような場合、動作主句は(18c)のように「ニ」を伴う。「除項ラレ」が関与していると考えられる受身文がイベントプロセスを表現する場合も存在する((19)参照)。しかし、そのような場合動作主句は示されない。

(19)　尊はき給へる霊剣をぬいて草をなぎ給へば、はむけ一里がうちは草みなながれぬ。（覚一平家・11）

- よって、19 世紀ニヨッテ受身文導入説は、動作主句としてのニヨッテ句導入と捉えることにより、「除項ラレ」が昔から存在していたという説と共存できる。

4. 結論

- 古代日本語においての無生物を主語とする受身文のうち、全てではないが、一部は「除項ラレ」が関与していると考えるのが妥当である。

調査資料：

【上代語】万葉集［7-8 世紀ころ］：新編日本古典文学全集

【中古語】古今和歌集［905］／竹取物語［9 世紀前半～10 世紀前半］／伊勢物語［10 世紀前半～中頃か］／大和物語［10 世紀中頃］／土佐日記［955 頃］／落窪物語［10 世紀後半］／堤中納言物語［11 世紀半ば～12 世紀ころ］／枕草子［11 世紀前半］／源氏物語［11 世紀前半］／大鏡［11 世紀前半］／更級日記［11 世紀中～後半］／讃岐典侍日記［12 世紀前半］：上記、すべて新編日本古典文学全集

【中世語】十訓抄［13 世紀ころ］：新編日本古典文学全集／平家物語（覚一本）［13 世紀ころ］：日本古典文学大系／エソポのハブラス［1593］：大塚光信・来田隆編（1999）『エソポのハブラス：本文と総索引』清文堂出版

参考文献：

原田信一 (1974)「中古語受身文についての一考察」『季刊文学・語学』74: 44-52, 全国大学国語国文学会［原田信一（著）・福井直樹（編）『シンタクスと意味：原田信一　言語学論文選集』大修館書店、2000 に所収（pp. 516-527）］.

Hayashishita, J.-R. & Iwao Takai (2017) "On Japanese passive," Unpublished manuscript, University of Otago & Kyushu University.

金水敏 (1991)「受動文の歴史についての一考察」『国語学』164: 1-14, 国語学会.

金水敏 (1992)「欧文翻訳と受動文---江戸時代を中心に---」文化言語学編集委員会(編)『文化言語学---その提言と建設---』pp.547-562, 三省堂.

金水敏 (1993)「受動文の固有・非固有性について」近代語学会(編)『近代語研究』第 9 集, pp. 474-508, 武蔵野書院

小杉商一 (1979)「非情の受身について」『田辺博士古希記念助詞助動詞論叢』pp. 473-488, 桜楓社.

Kuroda, S-Y. (1979) "On Japanese Passives," Bedell, G., et al. (eds.), Exploration in Linguistics: Papers in Honor of Kazuko Inoue, pp. 305-347, Kenkyusha.

益岡隆志 (1991)「受動表現と主観性」仁田義雄(編)「日本語のヴォイスと他動性」, pp.105-121, くろしお出版

山田孝雄 (1908)『日本文法論』宝文館.